

日本・チリ外交関係樹立 120 周年

山口 恵美子

はじめに

1897年に日本チリ修好通商航海条約が締結され、両国は2017年で修好120周年を迎える。両国の外交関係樹立については、『日本チリ交流史』（日本チリ修好100周年記念事業組織委員会1997年）に詳細が記されているのでここでは触れないが、マタ・チリ大学教授によると、オヒギンズの時代であった1819年～20年に、銅を求める東インド会社がチリに接近し、1800年代の半ばにはバルパライソやチリ北部から、銅や麦がアジアに輸出されていた。その後、バルマセダ大統領が硝石の輸出のため日本及び中国にミッションを派遣し、それが結果的に日本チリ修好通商航海条約の締結につながった。

時を経てチリは1943年1月に対日外交関係断絶を決定した。ジャコベリ・カトリカ大学教授によると、チリでは当初、戦争に参加しても自国の沿岸の自衛が十分ではないと考えられていたこと、また当時は国際関係では中立性を保つことがよしとされていたこと等により、第一次世界大戦と同様に、第二次世界大戦においても中立性を保とうとしたが、1941年11月のペドロ・アギレ・セルダ大統領の逝去等もあり、日本との外交関係も断絶することとなった。

しかし両国は1952年10月に外交関係を再開してからは、鉱業等による経済関係を中心に二国間関係を発展させてきた。

最近の二国間関係

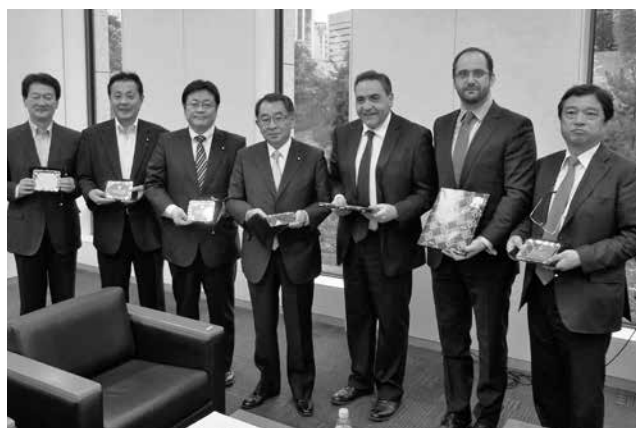
最近の両国関係は2014年の安倍総理大臣のチリ訪問を経て、さらに強化され、また多様化されてきた。経済関係では、日本は2011年から13年の3年間、単年度で対チリ直接投資額第1位となった。また日本はチリにとって中国、米国に次いで第3の輸出相手国で、銅鉱や木材チップ、モリブデン、サケ・マス等が日本に輸出されている。日本からの輸入は第7位で、日本から自動車や軽油・ディーゼル油、タイヤ、自動車部品等が輸出されている。2016年には、日・チリ租税条約が発効した。

地震と津波を共有する両国の間では、防災協力や震災交流も活発に行われてきた。東日本大震災後、イースター島から南三陸町にモアイ像が寄贈された。2012年から16年には『津波に強い地域づくり技術の向上に関する研究』に基づく防災協力も行われた。2013年には、両国の被災地の高校生も参加した「はるかな友に心寄せて」の震災交流プロジェクトが実施されたほか、チリで両国の被災者による震災ワークショップ「結び塾」が開催された。2013年には、『モアイの絆－チリ・イースター島から南三陸町への贈り物』の本が発行（言視舎刊）された。2016年2月にはノボル電機からチリ沿岸の漁業組合に対して100台のメガホンが供与された。7月には二階俊博衆議院議員による講演会「国土強靱化の取組を日本・チリから世界の人々へ～津波災害が紡ぐ1万7千キロの絆」が行われた。11月には両国で津波防災訓練が実施された。

科学技術・学術交流も活発である。2013年には、チリで中南米初の「東大フォーラム」が開催され、東京大学から100名以上の研究者等がチリを訪問し、カトリカ大学及びチリ大学でワークショップ等が行われた。また2016年には、大阪大学の石黒教授のアンドロイドによる講演や、バチエレ大統領とアンドロイドとの意見交換も行われ、メディアで大々的に報じられたほか、東京大学、チリ大学、カトリカ大学共同主催の日本・チリ・パタゴニア学術フォーラムが開催された。その他、筑波大学、上智大学、岡山大学、山形大学等による交流も活発に行われている。天文学では、国立天文台による活動（ALMA）や東京大学の世界最高標の天体望遠鏡設置計画（TAO計画）も進められている。

日本の文化への関心もさらに高まっている。2013年のガブリエラ・ミストラル文化センターでの日本フェスティバル「日の出ずる国の祭典」は、チリのラン航空の機内誌でも紹介された。2015年に開催された草間弥生展には16万人以上が訪れた。同年から翌年に大統領府文化センターで実施されたサムライ

展には約10万人が訪れた。この期間中、大統領府文化センターでは丸紅と日本航空の協力による着物展、日系人移住写真展、日本の文学講演会、生け花デモンストラクション、武道・書道・日本語教室等、チリで最も来館者数が多い文化施設で約半年にわたり多くの日本イベントが行われた。また日本のアニメイベントには毎年3万人以上が訪れるようになった。



訪日したエスピノサ・チリ下院議長、コート下院チリ日本友好議員連盟会長と日智友好議員連盟（2017年9月4日）
出所：駐日チリ大使館

120周年事業

(1) 主な周年事業

1月に蘭浦外務副大臣（当時）がチリを訪問したほか、3月の太平洋同盟首脳会合には蘭浦副大臣及び越智内閣府副大臣（当時）が出席した。8月には、海上自衛隊練習艦隊がバルパライソに寄港した。9月には、エスピノサ・チリ下院議長、コート下院チリ日本友好議員連盟会長が訪日し、日本からは塩谷立日智友好議連会長一行がチリを訪問した。9月26日から10月2日には、秋篠宮同妃両殿下がチリを御訪問された。

経済協力分野では、4月に約半世紀に及ぶ二国間協力が結実したチリのサケ産業発展に関する本『Chile's Salmon Industry』の発刊記念セミナーが開催された。

また科学技術交流、学術・文化交流も活発である。1月には、文部科学省の元国費留学生であるアビレス学長率いるラ・セレナ大学で今年10回目となる日智友好週間が実施された。チリ国会未来会議では、天野浩名古屋大学教授や岩谷徹東京工芸大学教授の講演が行われた。6月には、大統領府文化センター、サンティアゴ市立劇場、チリ大学で東京藝術大学フィルハーモニア管弦楽団による公演が実施された。カトリカ大学では、4月にテレサ・カネパ氏による日本の漆に関する講演会が実施されたほか、6月には同大

学の協力により、現代美術館でロナルド・ナカソネ氏による書展が開催された。また、9月にはフィニス・テラエ大学で国際交流基金巡回展「武道の精神」が実施された。

日系団体も積極的に活動している。3月には中央日本人会により、日本食普及親善大使、大野剛浩氏による講演会や大型日本紹介事業「和太鼓と四季」が実施された。8月の海上自衛隊練習艦隊のチリ寄港の際には、バルパライソ日系人協会による歓迎行事が開催された。

9月には、国立図書館で、日本人移住者常川九太郎の写真展が開催された。1920年代にサンティアゴにオープンした常川氏の写真館（カサ・ツネカワ）は、家族の記念写真を撮ることが出来る写真館として一躍有名となった。常川氏が撮影したチリ人の肖像写真は、チリには無かった新技術を取り入れた貴重なものであり、その後国立図書館が買い取っている。



サンティアゴ市立劇場での東京藝術大学フィルハーモニア管弦楽団公演
（2017年6月24,25日）
出所：Andes Shoji

(2) オールジャパンでの取り組み

120周年事業の実施は、チリに進出している日本企業の協力に依るところが非常に大きい。また、前述の中央日本人会や2015年に外務大臣表彰を受けたバルパライソ日系人協会のほか、日智文化協会や日本総合学習センター等の日本関係機関も非常に積極的に日本紹介事業を行っている。さらに日本語コースのあるサンティアゴ大学、アウストラル大学、コンセプション大学では毎年日本祭りが行われている。

近年、日本関連事業には、非常に多くの人々が足を運ぶようになった。関連事業を自発的に企画・実施する団体も増えてきた。チリでの日本のプレゼンスは飛躍的に向上している。今後日本のプレゼンスをさらに高めていくためには、関係団体間の横の連携が非常に重要となる。日本紹介を通じて日本人とチリ人とのコミュニケーションがより活発となり、それが相互理解につながることを期待する。

今後の展望

最近、チリとアジアの距離は太平洋を越えてどんどん近づいている。チリは、アジア太平洋諸国との関係強化にも力をいれている。チリはASEANとの関係強化も進めており、2016年に東南アジア友好協力条約（TAC）に署名し、ASEAN地域フォーラム（ARF）加入にも関心を示している。中国は、チリにとって第一の貿易国となっているほか、両国で二重課税防止条約も締結している。今年5月にはバチレ大統領が中国の「一帯一路」国際会議に参加し、チリはアジアインフラ投資銀行に加盟した。

レジェス・マタ元中国チリ大使やハラミージョ・カトリカ大学教授、レイ・アドルフ・イバニェス大学教授、ネグメ・ディエゴ・ポルタレス大学教授等チリのアジア専門家によるチリとアジアとの関係に関するコメントをふまえると、チリの一帯一路国際会議への参加やアジアインフラ投資銀行への加盟により、アジアと南米との関係強化の中で、チリが南米でのリーダーシップを発揮し、アジアとの関係強化における架け橋となること、チリが必要としているインフラ整備を通じて、チリが近年あらためて重視しているアルゼンチンとも関係が強化される、またチリが歴史的に重視しているヨーロッパとの関係も強化されること等が期待されている。これらの期待はチリの主なニーズに基づくものであり、アジ

アとの関係強化においては、それらのニーズが満たされることが期待されていると言えるかもしれない。日本には、今後、投資促進のために InvestChile の事務所が開設される。今後この事務所を通じて日本がどのような役割を果たしていくかが問われることになる。

チリ現政権は、他のラテンアメリカ諸国との関係、特に太平洋同盟とメルコスールの関係強化について「多様性への収斂」を強調しているが、今後はアジアを含めグローバルに「多様性への収斂」が進められていくだろう。

また、日本とチリとの二国間では、文化交流や科学技術・学術交流が活発に行われていること等により、若者を中心に、日本文化に関心のある人や、交換留学生が増えている。中長期的に、両国の距離はより一層近いものとなるだろう。

（本稿は執筆者個人の見方を述べたものであり、外務省・在チリ日本国大使館の見解を示すものではない。）

（やまぐち えみこ 前在チリ日本国大使館一等書記官（広報文化担当）、現外務省国際協力局緊急・人道支援課課長補佐）

ラテンアメリカ参考図書案内



『パタゴニア』

ブルース・チャトウィン 芹沢真理子訳

2017年9月 河出書房新社（文庫） 390頁 1,200円＋税 ISBN978-4-309-46451-0

東西冷戦の最中、核戦争による死の灰から一番安全なところとしてパタゴニアを選び訪れるべくアルゼンチンに旅し、ブエノスアイレス、ラプラタ、そしてパタゴニアの砂漠を前に控えた最後の都市バイアブランカを経てパタゴニアに入る。あちこちの町村や人家を辿ってそこに住む人たちの語りと過去のパタゴニア旅行者や入植者の行動や出来事の回顧の挿話が行き来するが、これらがパタゴニア開拓時代と現代の世相とで異なる人々の言動、自然と人間の営みを語っていて実に面白い。

チャトウィンは1940年にイングランドに生まれ48歳でエイズにより亡くなるまで、南米、西アフリカ、オーストラリア等を歴訪し、トラベルライターとしては屈指のパタゴニア通で、『パタゴニアふたたび』というポール・セラーとの共著（白水社2015年 <http://latin-america.jp/archives/22677>）もあり、そのほか西アフリカのダオメー（現ベナン）のウイダに赴いたブラジル人奴隷商人一族の栄光と蹉跌を描いた歴史小説『ウイダの総督』（めろくまー 1989年。新訳『ウイダーの副王』白水社2015年）もある。

（桜井 敏浩）